

「日系カナダ人の言語実践に関する
社会言語学的研究」

時田 朋子 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

1. はじめに

英語とフランス語の二言語が国家の公用語であり、一世紀以上にわたり多くの移民を受け入れてきたカナダでは、二つ以上の言語を話す個人、つまりマルチリンガルが多い。しかし少数派言語話者のマルチリンガリズムは、これまで研究対象としてあまり取り上げられてこなかった。そこで本研究は、日本語を継承語とするバンクーバーのマルチリンガルを対象に、社会における言語の状況や多言語使用の分析から、その特徴を明らかにする。

2. 概念的枠組み

少数派言語の維持には、各言語集団の民族言語的活力 (Ethnolinguistic vitality) (Giles, Bourhis, & Taylor, 1977) の度合いが関わる。民族言語的活力は、「異なる言語集団の人々が交流する場で、ある言語集団を独自のかつ活動的な集合体として行動させるもの」と定義される。Landry & Allard (1994)によると、民族言語的活力は、個人の言語使用ネットワークを決定し、言語能力の発達や言語態度に影響を与え、言語行動に結びつく。

3. 結果・考察

3.1. カナダにおける多文化・多言語状況

カナダは1969年の「公用語法」以来、英語とフランス語を公用語と定めている。さらに1971年より多文化主義政策を採り、少数派集団の文化や継承語の維持を推進している。本研究の対象地であるブリティッシュコロンビア州もまた、多文化主義を採用している。

3.2. バンクーバー社会における日本語

本節では、バンクーバーにおいて、日本語がどのような民族言語的活力を持つかについて、地位的・人口統計的・制度的要素の点から分析した。以下はそれらの概要である。

日本からバンクーバーへの移住は19世紀末より開始されたが、現在同都市に居住する2万人程度の日系人・日本人は(Statistics Canada, 2002)、移住期・世代などにより多様な背景をもち、均質化された集団ではない。さらに英語を話し、他民族と結婚している者がほとんどである。だが一方、就労ビザや学生ビザをもつ日本人短期滞在者も多い。

多様性を認めるカナダおよび州政府のもと、限られるが、バンクーバーには日本語を使用し日本文化を伝える機関・制度・ネットワークが存在する。日系人・日本人は、自らの目的・志向に従い、それらを享受している。つまり、このような自律的な相互関係が、バンクーバーにおける日本語維持の活力となっているのである。ただし日本語維持は義務でなく、個人によりその関わり方は異なるうえ、個人においても年齢・世代・社会や家庭環

境などに応じて変化する。それに伴い、日本語の活力は今後も変化するであろう。

3.3. 家庭における言語実践

本節では、日本語と英語を使用する2家族を対象に、言語使用を分析した。両家族とも、父親は英語系カナダ人、母親は国際結婚によりカナダに移住した日本人である。子どもは、家族1では男子2人、家族2では男子1人で、英語系の小学校に通い、週に一度日本語学校に通う。2006年2・3月、各家族につき1.5-2時間分の会話を、母親が録音した。それより作成したコーパスを用いて、発話をターンごとに、日本語のみ、英語のみ、日本語と英語の混合、言語区分不可能（呼びかけなど）と分け、頻度に関する特徴を分析した。

両家族ともに、母親は日本語を多用する。彼女たちは英語が話せないのではなく、むしろ積極的に日本語を使用している。父親については、家族1の父親は日本語を理解しないため、彼との会話には英語が使用され、その結果、全体的に英語の使用頻度が高くなる。一方、家族2の父親は日本語の発話は少ないものの理解するため、母親や子どもの日本語使用が妨げられない。子どもは、両家族とも父親に英語を使用する。家族2の子どもは母親には日本語を使用し、相手により使い分ける。しかし家族1の子どもたちは、母親に対して日本語を使用するものの、英語を使用することが多い。兄弟間では英語が用いられることや父親が日本語を解さないことが影響しているのであろう。このように、同じ家族の中でも、また言語的背景が類似する家族間でも、使用する言語の頻度は異なる。

両家族とも日本語と英語の使用が観察されたが、個人的背景・言語能力などの影響を受け、各人の言語使用頻度や日本語と英語の混合の仕方は異なっていた。今後は、会話状況や内容に応じた言語使用など、個人の多言語使用に関する分析をさらに行う必要がある。

4. 結論

英語圏であるバンクーバーには多様な民族が住み、多くの言語が話されている。多文化主義政策を採るカナダでは、少数派の言語・文化の維持は推奨されるが、実際にそれらを維持することは容易でない。日本語についても、多様な日系の機関・制度は存在するが、今後の動向はわからない。バンクーバーという多文化・多言語状況の中で、個人はさまざまな影響を受け、常に独自の多文化・多言語状態を構築しているからである。

それは、言語使用の際に、相手や状況に合わせて言語を使い分けるなど、個人が独自のマルチリンガリズムを実践していることにも見られる。今後は、言語コーパスを増やしかつ改善させながら、個人のマルチリンガリズム実践の特徴をさらに探していきたい。

参考文献

Giles, H., Bourhis, R. Y., & Taylor, D. M. (1977). Towards a theory of language in ethnic group relations. In H. Giles (Ed.), Language, ethnicity and intergroup relations (pp. 307-348).

London: Academic Press.

Landry, R., & Allard, R. (1994). The Acadians of New Brunswick: Demolinguistic realities and the vitality of French language. International Journal of Sociology of Language, 105/106, 181-215.

Statistics Canada. (2002). 2001 Census of Canada. Ottawa: Statistics Canada.